

琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統

五十嵐陽介
(国立国語研究所)

要旨

ジャポニック

日琉祖語が、8世紀には少なくとも3系統に分岐していたという見解は広く受け入れられている。また、三大系統群のいずれも現代まで完全には消滅していないとする点においても研究者の意見は一致している。しかしながら、日本本土（八丈島・青ヶ島と琉球列島を除いた日本列島）の現代の諸言語がどの系統に属しているかに関しては、意見の不一致が見られる。具体的には、現代の東日本（およそ岐阜県・愛知県以东の日本本土）と現代の九州の言語が、8世紀の畿内の言語の系統すなわち中央語系統の言語に置き換えられたものなのか否かに関して、意見の不一致が見られる。本稿は、現代の東日本と九州の言語に非中央語的形質が残っていることを確認したのちに、中央語系言語に置き換えられたか否かという問題を論じる。そして、非中央語的形質が基礎語彙に残っている事実に基づき、すくなくとも九州の言語は中央語系言語に置き換えられていないと結論する。

1. はじめに

ジャポニック

日琉祖語 (Proto-Japonic, pJ) が、8世紀には少なくとも3系統に分岐していたという見解は広く受け入れられている (服部 1976a; Pellard 2015)。1つは8世紀に記録が残る畿内の言語、すなわち上代中央語 (West Old Japanese, WOJ) の系統である。もう1つは8世紀の万葉集東歌・防人歌等に限られた量の記録が残る、中部地方東部、関東地方、東北地方南部の言語、すなわち上代東国語 (East Old Japanese, EOJ) の系統である。残る1つは現代の琉球列島の諸言語の共通祖先、琉球祖語 (Proto-Ryukyuan, pR) の系統につながる系統である。これを琉球語系統と呼ぶと議論が混乱するので、本稿では南国語系統と呼ぶ (1)。

- (1) 日琉語族三大系統群
 - a. 中央語系統 上代中央語 (8世紀、畿内) の属する系統群
 - b. 東国語系統 上代東国語 (8世紀、東日本) の属する系統群
 - c. 南国語系統 現代の琉球列島の諸言語の系統につながる系統群

南国語系言語は、はじめ九州で話されていたが、その話者はやがて琉球列島に移住したと推定される (服部 1976a; Pellard 2015)。その移住の年代は10世紀~11世紀頃と推定する説が有力である (安里 2002; Pellard 2015)。したがって8世紀の段階では、南国語系言語は九州で用いられており、琉球列島では用いられていなかったと推定される。以上から、日琉語族の三大系統群の8世紀の地理的分布はおおよそ図1のように表すことができるだろう。

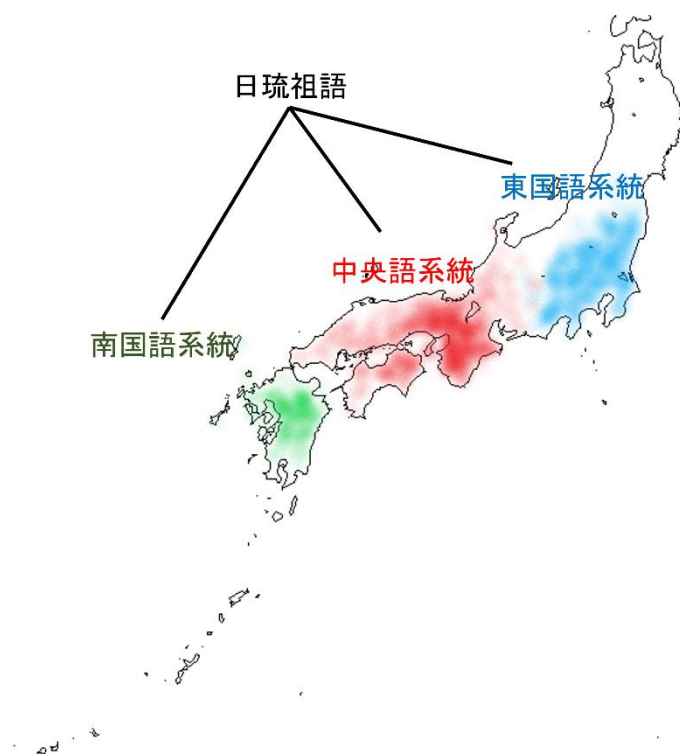


図1 8世紀の日琉語族三大系統の地理的分布 (推定)

三大系統のいずれも消滅しておらず、現代の諸言語として生き残っているとする点においても研究者の意見は一致している。しかしながら、日本本土 (八丈島・青ヶ島と琉球列島を除いた日本列島) の現代の諸言語がどの系統に属しているかに関しては、意見の不一致が見られる (服部 1976a; Pellard 2015; 五十嵐 2017b, 2018ab, 2021)。具体的には、現代の東日本 (およそ岐阜県・愛知県以东の日本本土) と九州の言語が中央語系統に言語に置き換えられたものなのか否かに関して意見の不一致が見られる。言語の置き換え (language shift) とは、ある言語共同体がその使用言語を別の言語に変えることを指す。致命的なことに、置き換えを仮定する枠組みは、置き換えの有無を判断する基準を提示していない。

本研究の目的は、現代の東日本と九州の言語に非中央語的形質が残っていることを確認すること、現代の東日本と九州の言語が中央語系言語に置き換えられたものなのか否かを論じること、少なくとも九州の言語では中央語系言語への置き換えが生じなかったとみなせることを示すことにある。以下、第2節では、中央語系言語への置き換えに関して見解を異にする3種類の系統樹モデルを論じる。第3節では、琉球諸語と八丈語が非中央語系統であることを確認する。第4節では、日本本土の諸言語には非中央語系言語の痕跡が確実に見つかることを示し。第5節では、九州語が南国語系統に、東日本語が東国語系統に属するとする見解を支持する証拠を論じる。第6節では九州と東日本で中央語系言語への置き換えが生じたか否かを検討する。第7節では結論を述べる。

2. 日琉諸語の3つの系統樹モデル

日琉諸語の系統分類としては Pellard (2015) によるモデルが広く受け入れられている。Pellard (2015) によると、南国語系言語は九州から消滅し、現代では琉球列島のみに残存する。また、東国語系言語は東日本から消滅し、現代では八丈島と青ヶ島にのみ残存する (図1)。現在通説となっているこのモデルを、本稿では P モデルと呼ぶ。P モデルの特徴は、図2の赤色が示すように、日本本土の諸言語はひとつ残らず中央語系言語に置き換えられたとする点である。

この通説に対して、服部四郎は 40 年以上前に図3のような系統樹を提案している (服部 1976a)。これを H モデルと呼ぼう。H モデルは、東国語系言語が日本本土から消滅し、八丈島・青ヶ島にのみ残存する点では P モデルと同じであるが、現代九州語の取り扱いが異なる。服部 (1976a) によると、現代九州語は琉球列島の諸言語と音変化を共有しており、これによって九州と琉球列島の諸言語は単系統群をなすという。すなわち九州では中央語系言語への置き換えは生じず、南国語系言語が九州に現代も残存するとする。

五十嵐 (2017b, 2018b, 2021) は、中央語系言語の置き換えに関して最も先鋭的な立場を取る。この I モデルでは、九州と東日本で中央語系言語の置き換えが生じず、南国語系言語と東国語系言語がそれぞれ現代に至るまで用いられているとする (図4)。

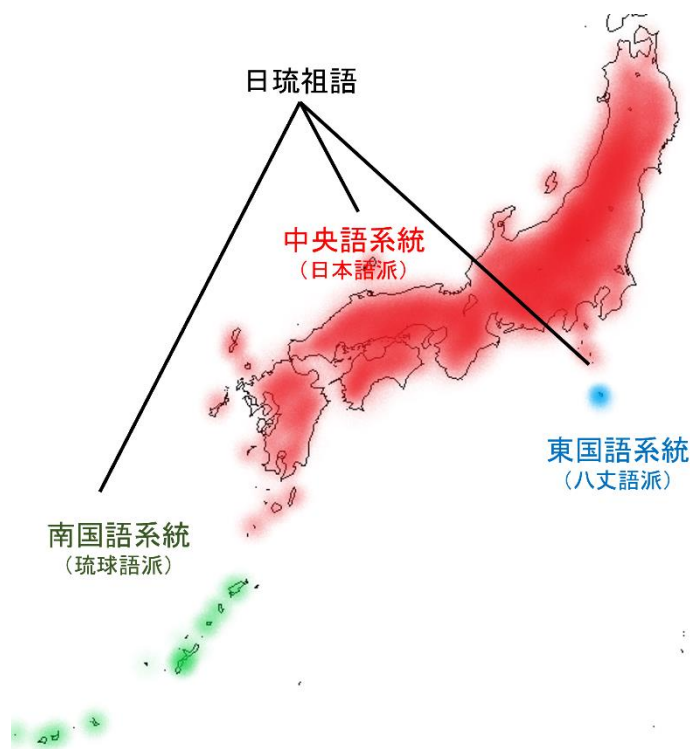


図2 Pモデル (Pellard 2015)

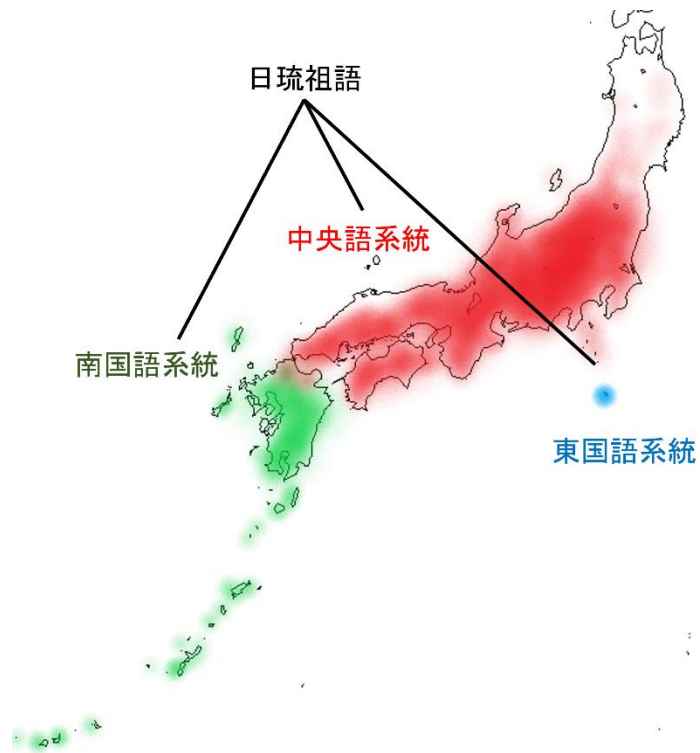


図3 Hモデル (服部 1976a)

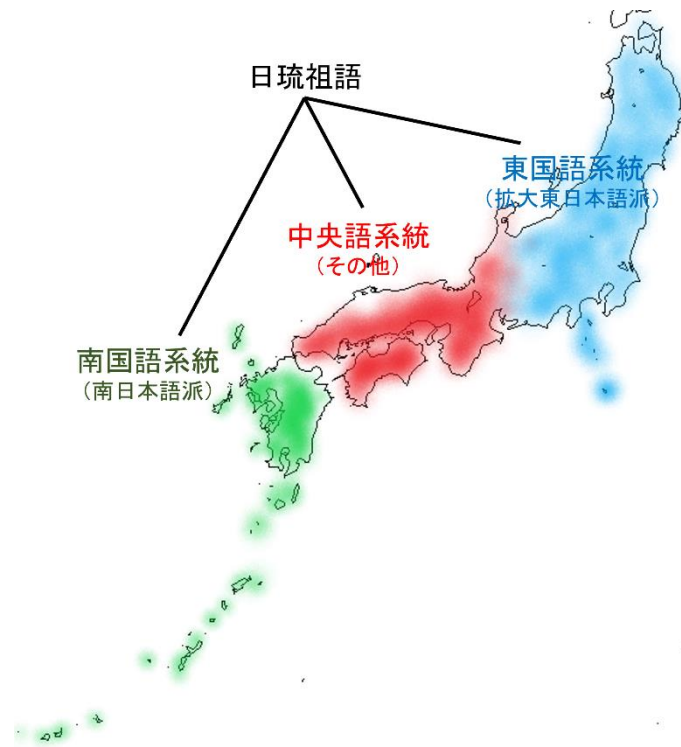


図4 Iモデル (五十嵐 2017b, 2018b, 2021)

3モデルは、中央語系言語との著しい接触に起因する変化が日本本土の諸言語に生じた結果、日本本土の諸言語には中央語的形質が広く認められるとする点で一致している。見解の違いは、言語接触による収斂変化が中央語系言語への置き換えとみなせるものか否かにある。置き換えに関する3モデルの見解の相違は、(2)のように表すことができる。

(2) 3モデルの違い (X ⇒ Yは「XからYへの置き換え」を表す)

a. Pモデル	東日本	東国語系統 ⇒ 中央語系統
	九州	南国語系統 ⇒ 中央語系統
b. Hモデル	東日本	東国語系統 ⇒ 中央語系統
	九州	南国語系統
c. Iモデル	東日本	東国語系統
	九州	南国語系統

次節で明らかにするように、九州と東日本の諸言語には、非中央語系言語の痕跡が確実に見つかる。置き換えを仮定するモデルでは、それらは基層言語(南国語系統・東国語系言語)の痕跡とみなされる。しかしながら、五十嵐(2021)が指摘するように、これまでの研究は何をもって言語の置き換えが生じたかを判断するのかを明らかにしないまま、中央語系言語の置き換えを論じているという問題がある。

3. 琉球諸語と八丈語が非中央語系統であることを示す音変化

3.1 中央語を定義する音変化

系統分類の唯一の基準は共通改新である(Leskien 1876; Brugmann 1884; Fox 1995; Atkinson and Gray 2005; Campbell and Poser 2008)。改新(innovation)あるいは共通派生形質とは、特定の時代に新たに生じた形質のことである。改新は、語彙、音韻、形態、統語、意味のすべての面で生じるが、中央語系統とその他の系統を峻別する改新として重要視されてきたのは、音韻における改新、すなわち音変化である。具体的にはpJにおける以下の4種類の母音に生じた音変化である。

(3) *əi *e *o *ia

中央語系統では、これらの母音が(4)の音変化を被っており、これらの音変化が中央語系統を定義する(服部 1976a, 1978ab, 1979; Frellesvig and Whitman 2004, 2008; Pellard 2008, 2013, 2015, forthcoming; Frellesvig 2010)。WOJには母音に甲類・乙類の区別がある。本稿ではそれを下付き文字(1 = 甲類、2 = 乙類)で表す。甲乙の区別は9世紀以降失われる。

(4) 中央語系統を定義する音変化

- a. $pJ *e > WOJ i_1 > i$
- b. $pJ *o > WOJ u = u$
- c. $pJ *əi > WOJ i_2 > i$
- d. $pJ *ia > WOJ e_1 > e$

(4ab) は、中段母音 *e, *o が高段母音 (狭母音) になる変化なので、特に中段母音上昇 (mid-vowel raising, MVR) と呼ばれる (Frellesvig and Whitman 2004, 2008)。

(4) の音変化のいずれかを経験していない諸言語は非中央語系統とみなされる。

3.2 琉球諸語が非中央語系統である証拠

琉球諸語の共通祖先である pR は MVR (4ab) を被っておらず、pJ *e と *o を保持している (服部 1976a, 1978ab, 1979; Thorpe 1983; Pellard 2008, 2013, 2015, forthcoming)。pJ *e, *o をそれぞれ含む「大蒜」と「海」の pR の反映形は (5) の通りである。

(5) 琉球祖語における pJ *e, *o の保持

- a. $pJ *peru$ 2.1 「大蒜」 > $pR *peru$ A :: $WOJ piru$
- b. $pJ *omi$ 2.4 「海」 > $pR *omi$ C :: $WOJ umi_1$

したがって、琉球諸語は非中央語系統である。

さらに琉球諸語には (4c) が生じず、代わりに (6) を被っている (服部 1976a; Pellard 2008)。

(6) 琉球諸語を定義づける音変化

$$pJ *əi > pR *e$$

例えば、pJ *kəi 「木」は pR *kə 「木」となり、pJ *əkəi- 「起きる」は pR *okə- 「起きる」となる。(6) の改新により、琉球諸語という系統群が定義される。

3.3 八丈語が非中央語系統である証拠

八丈語もまた MVR (4ab) を経験していないとみなされている (服部 1968, 1976a)。その証拠は主として形容詞、動詞の連体形語尾に認められる。

(7) 八丈語における pJ *e, *o の保持

- a. $pJ *-ke$ 形容詞連体形語尾 > 八丈 $-ke$:: $WOJ -ki_1$
- b. $pJ *-o$ 動詞連体形語尾 > 八丈 $-o$:: $WOJ -u$

例えば pJ *naga-ke 「長い (連体)」は、WOJ では *naga-ki* であるが、八丈語では *naga-ke* である。また pJ *nak-o 「泣く (連体)」は WOJ では *nak-u* となり、終止形の *nak-u* 「泣く (終止)」 (< pJ *kak-u) と区別がなくなるが、八丈語では *nak-o* 「泣く (連体)」であり、終止形の *nak-u* 「泣く (終止)」と区別される。したがって、八丈語は非中央語系統である。

八丈語にはさらに、(4d) が生じず、代わりに (8) を被っており、八丈語と EOJ はこの改新を共有している (服部 1968, 1976a)。

(8) 東国語系統を定義づける音変化

pJ *ia > EOJ a > 八丈 a

例えば pJ *pur- 「降る」に完了を表す諸接辞を付した $*pJ$ *pur-i-ar 「降った」は、WOJ では (4d) により *pur-er-* となるが、EOJ では (8) により *pur-ar-* となり、八丈語でも *φur-ar-* である。この共通改新により八丈語が含まれる東国語系統が定義される。

4. 現代九州語と現代東日本語が非中央語系統であることを示す音変化

4.1 音変化の共有/非共有を検討できる語彙

3.1 節で指摘したように、中央語系統を定義する音変化 (4) を被っていない言語は非中央語系統である。したがって、任意の言語が中央語系統か否かを判断するためには、 pJ の母音 **ai*, **e*, **o*, **ia* (3) を含む語 (形態素) の母音がどのように現れるかを検討すればよい。しかしながら、 pJ **ai*, **e*, **o*, **ia* が再建され、かつ現代日琉諸語に継承されている語 (形態素) の数は決して多くない (五十嵐 2021)。それらはおよそ表 1 に示す 20 前後の語 (形態素) に過ぎない。

2 節で指摘したように、日琉諸語は中央語系言語との接触による変化を被っているため、当然ながら、非中央語系統の諸言語は中央語系言語から語彙を借用している。もし表 1 の語の一部が借用によって中央語系言語の語に取って代わられれば、系統分類に利用可能な語の数はさらに少なくなる。実際に、服部 (1976b) は八丈語に pJ **e* の保持の証拠が乏しい事実を、中央語系言語との接触の結果であるとみなしている (五十嵐 2021 参照)。音変化の共有/非共有に基づく日琉諸語の系統分類は、必然的に、乏しい証拠の上に立たざるを得ない。

しかしながら重要なことは、中央語系統に生じた音変化を被っていない語が任意の言語に見つかる事実は、それ以外の解釈が可能であることを示す独立の証拠がない限り、その言語が非中央語系統であることを表すことである。中央語からの借用の可能性が自明である以上、証拠となる語数が少ないこと自体は、問題の言語が非中央語系統であるとする仮説を棄却するに十分ではない。

表1 pJ *əi, *e, *o, *ia が再建される語 (形態素)

母音	語		
*əi	*kəi 「木」 ¹	(服部 1976a)	
	*əkəi- 「起きる」	(服部 1976a)	
	*ərəi- 「下りる」	(五十嵐 accepted)	
	*ətəi- 「落ちる」	(服部 1976a)	
*e	*-ke 「形容詞連体形語尾」	(服部 1976a)	
	*peru 「大蒜」	(服部 1979)	
	*medu 「水」	(服部 1979)	
	*pezi 「肘」	(服部 1979)	
	*kedu 「傷」	(服部 1979)	
	*edu 「何れ」	(Thorpe 1983)	
	*memezu 「蚯蚓」	(Thorpe 1983)	
	*erə 「色」	(Pellard 2013)	
	*negə- 「濁る」	(Pellard 2013)	
	*o	*-o 「動詞連体形語尾」	(服部 1976a)
		*mogi 「麦」	(Pellard 2008)
		*moko 「婿」	(Pellard 2008)
*omi 「海」		(Pellard 2008)	
*kusori 「薬」		(Pellard 2013)	
*ori 「瓜」		(Pellard 2013)	
*ia	*-i-ar- 「完了の動詞接辞」	(服部 1976a)	

表2 長崎県旧西彼杵郡野母崎町 (原田 (編) 1993) と鹿児島県種子島中種子 (上村 1959; 植村 2001) の言語における pJ *o と *u の区別の保持.

	pJ *o		pJ *u		
pJ	*omi 「海」	*moko 「婿」	*uma 「馬」	*uma- 「旨い」	*mukaNtV 「百足」
西彼杵郡野母崎町	omi			mmaka	
種子島中種子	omi	moko	mma	mmaka	mukadze

¹ Vovin (2011)はさらに*jəməi 「黄泉」 (上代中央語 *jo2mi2 ~ jo2mo*) を再建する。

4.2 現代九州語が非中央語系統である証拠（音変化）

現代九州語が MVR (4ab) を経験していないことを示す証拠がある (五十嵐 2016; 2018a; 2021)。長崎県の言語、鹿児島県種子島の言語には $pJ *o$ が保持されていることを示す証拠がある (表 2)。 $pJ *e$ の保持に関しては、利用可能な資料から確実な証拠を得ることができないが、『鹿児島方言辞典』(橋口 2004) からは、 $pJ *memezu$ 「ミミズ」が *mimi-*ではなく *meme-*から始まる語となる言語が鹿児島県に多数見つかる (五十嵐 2016; 2018a; 2021)。同様に、 $pJ *medu$ 「水」が *mizu* あるいは *midu* ではなく、*mezu* となる言語が鹿児島県薩摩郡鹿島村藺牟田に見つかる (五十嵐 2016, 2018a, 2022)。これは現代九州語のすくなくとも一部が非中央語系統であることを示す証拠である。

現代九州語にはさらに、中央語を定義する改新 $pJ *əi > i$ (4c) を被らず、代わりに琉球祖語に生じたものと同じ改新 $pJ *əi > e$ (6) を被っていることを示す証拠がある。服部 (1976a) が初めて指摘したように、旧上二段動詞のうち語幹末母音に $pJ *əi$ が再建されるものが、その語幹末に *i* ではなく *e* を持つ言語が現代の九州に多数見つかる (9)。特に *ote-* 「落ちる」 (< $pJ *ətəi-$) は九州全県に確認できる (五十嵐 accepted)。

(9) 九州語における $pJ *əi > e$ の証拠 (五十嵐 accepted)

- | | | | | | | | |
|----|--------------------|---|-----------------|----|-------------|----|------------------------------|
| a. | $pJ *ətəi-$ 「落ちる」 | > | 宮崎 <i>ote-</i> | :: | $pR *ote-$ | :: | WOJ <i>oti-</i> |
| b. | $pJ *ərəi-$ 「下りる」 | > | 宮崎 <i>ore-</i> | :: | $pR *ore-$ | :: | WOJ <i>ori-</i> |
| c. | $pJ *əkəi-$ 「起きる」 | > | 宮崎 <i>oke-</i> | :: | $pR *oke-$ | :: | WOJ <i>oki₂-</i> |
| d. | $pJ *sugui-$ 「過ぎる」 | > | 宮崎 <i>sugi-</i> | :: | $pR *sugi-$ | :: | WOJ <i>sugi₂-</i> |
| e. | $pJ *ikui-$ 「生きる」 | > | 宮崎 <i>iki-</i> | :: | $pR *iki-$ | :: | WOJ N/A |

九州語における旧上二段動詞の語幹末母音 *-e* については、Pellard (2021) が指摘するように、音変化の結果ではなく類推の結果である可能性を検討する必要がある。すなわち、数の少ない旧上二段動詞が、より数の多い (語幹末に *-e* を取る) 旧下二段動詞に類推によって統合したという可能性である。実際に日本語学ではそのように解釈されてきた (迫野 1998; 彦坂 2001)。しかし五十嵐 (accepted) が示したように、宮崎県中部の言語には、旧上二段動詞語幹末母音は、類推ではなく音変化の結果とみなさなければならない証拠がある。九州のその他の言語における旧上二段動詞語幹末母音の分布も、類推仮説ではなく音変化仮説の方がうまく説明できる (五十嵐 accepted)。

$pJ *əi$ が再建される唯一の名詞に $pJ *kəi$ 「木」があるが、これが *ki* ではなく *ke* と反映される現代九州語は報告されていない。しかし服部 (1976a) が指摘するように、日本書紀景行紀には「木」を含むことがうかがえる豊前および筑後の地名ミケに、*ke₂* を表す音仮名 (概, 開) が与えられていることから、上代以前の九州語に *ke₂* 「木」が用いられていたことが推測される。

現代九州語に残る音変化 $pJ *əi > e$ の痕跡は、九州語が琉球諸語と同じ系統群、すなわち

本稿でいう南国語系統に属する証拠である。

4.3 現代東日本語が非中央語系統である証拠 (音変化)

現代東日本語のうち、新潟県と長野県の県境に位置する秋山郷の言語と、伊豆諸島北部の利島の言語 (馬瀬 1983; 大島 1984) には、これらの言語が非中央語系統であることを示す証拠が見つかる。これらの言語には、八丈語と同様に、動詞における連体形と終止形の区別の痕跡が認められ、前者は *-o* (< pJ *o)、後者は *-u* (< pJ *u) の語尾をとる。この事実は、中央語系統を定義する音変化 pJ *o > u (4b) がこれらの言語に生じなかったことを意味する。

秋山郷の言語にはこれに加えて、八丈語と同じように、形容詞に連体形と終止形の区別があり、前者の語尾は *-ke* である。この言語では pJ *ki は *tei* と反映され、pJ *ke は *ke* と反映されるので (Pellard 2008)、この言語における形容詞連体形語尾は、中央語系統を定義する音変化 pJ *e > i (4a) をこの言語が経験しなかったことを意味する。

秋山郷の言語と利島の言語における動詞連体形語尾と形容詞連体形語尾は WOJ と八丈語と類似することから、これらの2言語には、八丈語と同様に、WOJ との類似性が指摘されてきた (金田一 1967; 馬瀬 1983; 大島 1984)。その一方で、東国語系統に属する現代の諸言語は八丈語のみとする見解が支配的であり (金田一 1967; Kupchik 2011)、秋山郷と利島の言語は東国語系統に属すると主張されたことがない。先行研究がそのようにみなした根拠は不明であるが、pJ *e, *o の保持は、これらの言語が非中央語系統である証拠ではあるが、それらが東国語系統である証拠ではない。東国語系統を定義づける音変化は pJ *ia > a であり、この音変化は秋山郷の言語と利島の言語には確認されない。

いずれにせよ、現代東日本語である秋山郷の言語と利島の言語は、中央語系統を定義づける音変化 (4b) また (4c) を欠いており、非中央語系統とみなすことができる。

5. 現代九州語が南国語系統、現代東日本語が東国語系統であることを示す語彙

5.1 語彙における改新

系統分類の基準となる改新は音変化だけではなく、語彙の変化もある。語彙の共有自体は系統分類に役立たない。系統分類は、語における意味あるいは形式あるいはその双方の改新の共有によってのみ行われる。

日本本土の諸言語が単系統群 (中央語系統) であるとする P モデルが広く受け入れられているので、これらの諸言語が共有する語彙における改新が数多く認められているのではないかと想像されるが、そうではない。私の調査ではそのような語は2語に過ぎず、そのうちの1語は適当ではない。

Pellard (2015, 2021) は、中央語を定義する語彙における改新として (10) を挙げる。Pellard によると日本本土の諸言語はこの改新を共有しており、琉球諸語と八丈語は共有していないという。

- (10) a. *kami* 2.3 「髪」 (意味変化「上」 > 「髪」)
b. *otoko* 3.4 「男」

kami 2.3 「髪」 (10a) が改新となされるのは、元来「上」を意味していた *kami* 2.4 が「髪」を表すようになったという意味変化が想定されているためである。しかしながら *kami* 2.4 「上」と *kami* 2.3 「髪」はアクセントが異なるので同源ではない。「上」は2拍4類 (MJ *kami* LH) であり、「髪」は2拍3類 (MJ *kami* LL) である (金田一 1974)。したがって *kami* 2.3 「髪」を改新とする根拠は存在しない²。この語は、日本本土の諸言語がすべて中央語系統であることを示す証拠にはならない。

otoko 3.4 「男」 (10b) が改新とされる根拠は示されていない。Pellard (2015) の指摘するように「男」を表す語は日本本土の諸言語では *otoko* 3.4 であるが、pR では *weke- A 「男」であり (Celik 2022)、八丈語では *onokogo* (平山他 (編) 1992-93) である。*otoko* 3.4 「男」が古形の保持でないかぎり、この語は日本本土の諸言語からなる系統群を定義すると考えられる。この語が改新であるか検討してみよう。

otoko 3.4 「男」に対応する WOJ *woto₂ko₁* 「男、若い男性」は、WOJ *woto₂me₁* 「若い女性」との対比から、WOJ *woto₂ko₁* は複合形式であるため、「男」を意味する形態素は *ko₁*、「女」を意味する語は *me₁* であることが容易に推定される。WOJ の *ko₁* は、拘束形式としては「男」と「子」のいずれかの意味を持つが、自由形式としては「子」の意味のみを持つ (蜂矢 2007)。蜂矢 (2007) は、拘束形式のみに見られる「男」を WOJ *ko₁* の原義とみる。

Celik (2022) によると WOJ *ko₁* は、pJ *ku 「男」に指小辞 pJ *-a のついた pJ *ku-a 1.1 の反映である。pJ *ku-a 1.1 における *ku の WOJ における反映は、WOJ *womi₁na* 「若い女」の対義語の WOJ *woguna* 「幼い男」にみられる *gu* である (阪倉 1975)。

pJ *ku 「男」と明らかに関係するものに、WOJ *omina* 「年老いた女」の対義語の WOJ *oki₁na* 「年老いた男」や WOJ *kamuro₁mi₁* 「女神名」の対義語の WOJ *kamuro₁ki₁* 「男神名」に含まれる WOJ *ki₁* があり (蜂矢 2007)、pJ *ki 「男」も再建せざるを得ない (Celik 2022)。Celik (2022) によると pR *weke- A 「男」は pJ *ki 「男」に指小辞 pJ *-a のついた pJ *ki-a の反映形を後部要素に持つ。pJ *ki-a の反映形は、Celik (2022) によると、WOJ *woke₁* 「顕宗天皇の名、袁祢」、*oke₁* 「顕宗天皇の兄の仁賢天皇の名、意祢」の後部要素にも認められ、WOJ *woke₁* はまさに pR *weke- 「男」の同源語である。

以上から、pJ に再建できる「男」の意味を持つ語は *ki, *ki-a, *ku, *ku-a でありことがわかる。*ku-a を除いてすべてが WOJ の段階では拘束形式である。

WOJ *woto₂ko₁* 「男」と WOJ *woto₂me₁* 「女」が共有する語根 WOJ *woto₂*-は WOJ *woti-mi₁du*

² むしろ pR には *kami 2.3 「髪」を含むと考えられる pR *kamige c 「鬢」が再建されるので、*kami 2.3 「髪」は pJ に遡る古形であり、それが日本本土の諸言語で保持されたとみなすことができる可能性がある (Kenan Celik 私信)。しかしながら同時に、pR *kamige c 「鬢」が *kami 2.3 「髪」ではなく *kami 2.4 「上」を含む可能性も検討する必要があるだろう。

「若返りの水」の前部要素や、上二段動詞 WOJ *woti-* 「若返る、蘇生する、復活する」と同源とする説がある (蜂矢 2007)³。この説によれば、WOJ *woto*₂ は被覆形、WOJ *woti-* は露出形ということになる。露出形と被覆形における *i* ~ *o*₂ の交替から (服部 1978ab; Pellard 2008)、第 2 母音に **ai* を持つ **wətai* 「復活」が再建される。上代辞 (1967) によれば WOJ *woto*₂*ko*₁ 「男」と WOJ *woto*₂*me*₁ 「女」が「蘇生、復活」を意味する *woto*₂- を伴うことは、成人式における死と復活の観念が関係しているという。

以上から、WOJ *woto*₂*ko*₁ として反映される pJ **wətai-ku-a* は元来「復活した男、成人した男」を意味した語であると言える。pJ における「男」は **ki*, **ki-a*, **ku*, **ku-a* であったと推定されることから、「男」を意味する WOJ *woto*₂*ko*₁ およびそれに対応する日本本土の *otoko* 3.3 「男」は pJ で「男」を表した形式に取って代わった改新であるとみなせる。したがって、*otoko* 3.4 「男」は日本本土の諸言語の共有改新とみなしうる。たしかにこの改新が、pJ が WOJ、八丈語、琉球祖語に分岐する以前に生じ、後者の 2 系統で *otoko* 3.4 「男」の同源語が消失した可能性もあり、その場合、*otoko* 3.4 「男」は本土の諸言語すべてが中央語系統に属する証拠ではなくなる。しかし別の独立の証拠がない限り、*otoko* 3.4 「男」は Pellard 説を支持する証拠とみなさざるをえない。

いずれにせよ、本土の諸言語すべてが中央語系統に属する証拠として有効な証拠となる語彙における改新が、ただの 1 語にしか認められていない点は強調せねばならない。九州語や東日本語が非中央語系統であることを示す語彙の改新が、多数見つかるのであれば、P モデルではなく他の説 (H モデル・I モデル) が支持されることになる。次節以降に示すように、特に九州語に関してはそのような証拠が多数ある。

5.2 現代九州語が南国語系統である証拠 (語彙の改新)

九州語と琉球諸語における語彙の類似性は、古くは伊波 (1911; 1974) によって指摘されており、近年になって再び研究者の注目を浴びているが (狩俣 2016, 2018, 2020; Jarosz 2019, Jarosz et al. 2022)、九州語と琉球諸語が共有する語彙を最も包括的に調査したのは野原 (1979-83) である。しかしながら野原が枚挙した 800 弱の語の大部分は、九州以外の日本本土の諸言語にも観察されるため、九州語と琉球諸語のみに共有された語彙ではない。五十嵐 (2017a; 2018ab) は、野原 (1979-83) の語彙の中から、九州語と琉球諸語のみに共有されたものを選択し、さらに少数の語を加えた訳 70 項目の「九州・琉球同源語」を提案した。「九州・琉球同源語」の中から問題があることが比較的明らかなものを除いた 61 項目を表 3 に示す。

³ WOJ *woto*₂*ko*₁ 「男」・*woto*₂*me*₁ 「女」は語頭が *wo* であるが、WOJ *woguna* 「幼い男」・*womina* 「若い女」 (MJ *woguna* HHL ・*womina* HHL) の最初の語根 *wo-* 「小さい」とも、WOJ *wono*₂*ko*₁ 「幼い男」 (MJ *wonoko* HLL) の最初の語根 *wo-* 「雄、男」とも関係がない。WOJ *woto*₂*ko*₁ 「男」・*woto*₂*me*₁ 「女」 (MJ *wotoko* LLL ・*wotome* LHH) は低起式であり、いずれも高起式である *wo-* 「小さい」、*wo-* 「雄、男」とはアクセントが対応しない。

表3 九州語と琉球諸語のみが共有する語彙 (五十嵐 2018ab を一部改訂)

項目	備考
1 移動の目的を示す動詞接辞*-ga-i (pR *-ga) (野原 1979: 13)	
2 *-sa=i su- (pR *-sa su-) 「形容詞を動詞化する構文」	
3 *bakaw- BC 「奪う」 (野原 1982: 4)	
4 *ozom- BC 「目覚める」 (野原 1979: 10)	「恐れる」>「目覚める」
5 *jokow- BC 「休憩する」 (野原 1983: 6)	
6 *pum- (> pR *kum- A) 「(履物を) 履く」 (野原 1982: 11)	「踏む」>「履物を履く」
7 *obokure- > *obukure- (pR *obukure- A) (野原 1981a: 2)	
8 *kuke- > *puke- (pR *puke- BC) 「間引く」 (野原 1981a: 7)	
9 *kazime- BC 「片づける」 (野原 1979: 14)	
10 *katame- BC 「担ぐ」 (野原 1979: 14)	
11 *kamume- 「頭に載せる」 (> pR *kame-BC) (野原 1981a: 5)	
12 *kakiaw- BC 「間に合う」 (野原 1979: 13)	
13 *sudās- BC 「孵化する」 (野原 1981a: 20)	琉球外トカラ列島のみ
14 *ado B 「踵」 (野原 1979: 4)	
15 *suba B 「唇」 (野原 1981b: 1)	
16 *ira A 「胎盤」 (野原 1979: 6)	
17 *mata-basi B 「股座」 (野原 1982: 15)	
18 *kutibe C 「疣・虫刺されの跡」 (野原 1981a: 8)	
19 *uti-ti B 「内出血・打ち身」 (野原 1979: 8)	
20 *iriko 「鱗」 (pR irike B) (野原 1979: 7)	
21 *dou C 「自分自身」 (野原 1981b: 7)	「胴」>「自分自身」
22 *podo A 「身長」 (野原 1982: 14)	「程」>「身長」
23 *jokoi BC 「休み」 (野原 1983: 6)	
24 *pada 「時間的な間隔」	「空間的な間隔」>「時間的な間隔」
25 *naka-jokoi C 「中休み」 (野原 1981b: 14)	
26 *paru B 「平地・耕地」 (野原 1982: 6)	
27 *uwapara A 「上の方」 (野原 1981a: 3)	
28 *sone C 「海中の魚の取れる瀬」	「地上の地形」>「海中の地形」
29 *abo A 「洞穴・崖・溝」	
30 *poge A 「穴」 (野原 1982: 13)	

表3 続き

	項目	備考
31	*kusabi C 「ベラ」(野原 1981a: 7)	
32	*tikura A/B/C 「ボラの稚魚」(野原 1981b: 7)	
33	*padara C 「トウゴロウイワシ」	
34	*gattun ^V A/B/C 「メアジ」	
35	*sikiri C 「ナマコ」	
36	*kobosime C 「コウイカ」(野原 1981a: 11)	
37	*sugari B 「イイダコ」	
38	*kobu C 「蜘蛛」(野原 1981a: 11)	
39	*paberi(-V) B/C 「蛾・蝶」(野原 1982: 6)	
40	*kazam ^V C 「蚊・蚋」	
41	*tuburame? C 「蝸牛」(野原 1981b: 9)	
42	*ta-mina B 「田螺」(野原 1981b: 6)	
43	*taka-mina B 「タカセガイ・ギンダカハマガイ」	
44	*amamu C 「ヤドカリ」(野原 1979: 4)	琉球外トカラ列島のみ
45	*gaori 「苦瓜」(> pR *gaori-a C)(野原 1981b: 15)	
46	*bake 「蓬莱竹」(> pR *bake C 「竹製の籠・箆」)	
47	*peguro A 「鍋の煤」(野原 1982: 13)	
48	*gori 「滓・沈殿物」(pR *gore A)(野原 1981a: 12)	
49	*kara-pai A 「薪の灰」(野原 1981a: 4)	
50	*tanasi A 「単衣もの」(野原 1981b: 5)	
51	*igiri > *iri 「錐」(pR *iri B)	
52	*obi C 「籜」(野原 1979: 11)	「帯」>「籜」
53	*jani-moti C 「鳥もち」(野原 1983: 5)	
53	*jori-tuki A 「閏月」(野原 1983: 6)	
54	*tamasi A 「分け前」(野原 1981b: 5)	
55	*kjau-tuka B 「地震時の呪言」(野原 1981a: 6)	
56	*uti-ame B 「屋内に降り込む雨」(野原 1979: 8)	
57	*ki-waki 「木挽き」(pR *ke-waki)(野原 1981a: 7)	
58	*pada-moti B 「気候・肌触り」(野原 1982: 5)	
59	*siake A 「開墾」(野原 1981a: 15)	
60	*okka C 「借金」(野原 1979: 10)	
61	*butamasi 「悪い心がけ・愚か者」(野原 1981b: 6)	
62	*ne-no-pau-bosi 「北極星」(pR *ne-no-pa-bosi A)(野原 1982: 2)	琉球外トカラ列島のみ

最近では、Aleksandra Jarosz らによっても九州語と琉球諸語のみに共有された語彙の検討が行われている (Jarosz 2019, Jarosz et al. 2022)。彼らの語彙は五十嵐 (2017a, 2018ab) と重複するところが多く、新たに追加された項目の大部分には野原 (1979-83) と同じ問題が指摘できる。一部には同源性の認定に問題がある⁴。これについては稿を改めて論じる。今後の研究の進展によるが、「九州・琉球同源語」の規模はおそらく 60~70 項目程度に収まるだろう。

「九州・琉球同源語」は、南国語系統を定義する改新である可能性のほかに、日琉祖語に遡る古形である可能性、借用語である可能性、並行変化の結果である可能性がある。後者は系統的近縁性の根拠にはならない。しかしながら、60 以上の「九州・琉球同源語」のすべてを古形の保持、借用、並行変化の結果とみなすのは困難である。私は以前、*dou「自分自身」と*iri「錐」が改新であることを論証したが (五十嵐 2021; Igarashi 2022)、本稿では*suba「唇」が改新である証拠を示そう。

九州には「唇」を表す語として宮崎県南部と鹿児島県に広範に認められる *suba* と、それ以北の九州に広範に認められる *tuba*~*tsuba* とがあり、後者は山口県にも分布する (LAJ 1966-74: 116 図)。^{s>t} (強化) より^{t>s} (弱化) のほうが生じやすい変化なので pR *suba「唇」と対応する *suba* を改新とみなすことができる。一方で、中央語系言語には *suba* と一見関係しそうな WOJ *sipabuk*- (> MJ *sifabuk*-)「咳をする」と MJ *sufabur*-「しゃぶる」が在証され、実際にこれらと *suba* は同源だとする見解がある (上代辞 1967)。もしこれらと *suba* が同源であるならば、語頭が *s* である *suba* が古形である可能性が高まるが、以下に論じるように、いずれも *suba*「唇」と同源ではない。

WOJ *sipabuk*-「咳をする」(MJ *sifabuk*-u LHHL) は母音の対応が不規則であることが問題である。意味の面でも「咳」と「唇」の間に明確な関連を見いだせない。もし*sipaが身体部位名称であるならば、「唇」よりも「咽、喉」を想定した方が合理的であろう⁵。Martin (1987: 753) は*sipaの意味を「痰」とみなすが、この見解は「唇」とみなす見解より妥当であろう。

MJ *sufabur*-「しゃぶる」(*sufabur*-i HHHL) には母音に規則的な対応が認められ、意味の面でも「唇」との関連を見出すことが可能である。現代でも、MJ *sufabur*-「しゃぶる」と語根を共有していると思われる *suwabur*-、*subabur*-、*subakur*-「しゃぶる、なめる」が四国地方に見

⁴ 例えば Jarosz et al. (2022) は pR *mai A「米」を WOJ *mapii*「捧げ贈るもの」と同源であり、「贈り物」>「米」という意味の改新を認めるが、両者はアクセントが対応しないので同源ではない。WOJ *mapii* に対応する MJ *mafii* LL は 2 拍 3 類対応であるが、pR *mai A「米」は 2 拍 1 類あるいは 2 類対応である。pR *mai A「米」は漢語“米”からの借用であろう。Jarosz et al. (2022) が pR *mai A「米」を九州・琉球同源語とみる根拠は、九州に観察される *saku-mai*「粳米」に件の語根が認められることにあるが、これも漢語“作米”由来であろう。また *saku-mai*「粳米」は愛媛県、高知県にも認められるので (方大辞 1989)、「九州・琉球同源語」ではない。*saku-mai*「税として納める米」は島根県、愛媛県、岐阜県に認められる (方大辞 1989)。また Jarosz et al. (2022) は *saku*「粳米」が九州語と琉球諸語に共有されているとするが、この語は愛媛県、高知県にも認められるので (方大辞 1989)、「九州・琉球同源語」ではない。*saku*「粳米」は漢語“作米”の短縮 (clipping) の結果であろう。

⁵ 用例の初出がかなり遅いが *siwa-gare*-「しわがれる」もあることから、*sipaを「咽・喉」の意味とみるのは的外れではないだろう。また*sipaは WOJ *sita* 2.3「舌」と語根を共有している可能性がある。

つかる（方言辞 1989: 1272）。しかしながらアクセントが対応しないという問題がある。MJ *sufabur*-「しゃぶる」は高起式であるが、pR **suba*「唇」のアクセントはB型であり低起式対応である。九州の *suba, tuba* ~ *tsuba* も2拍3類対応であり低起式対応である。MJ *sufabur*-「しゃぶる」の語根は、九州語の *suba, tuba*「唇」とは無関係であり、むしろ同じく高起式の動詞**sup*-「吸う」との関連を見出す方が妥当であろう⁶。

以上のように、九州語 *suba, tuba* は、WOJ *sipabuk*-「咳をする」や MJ *sufabur*-「しゃぶる」とは関係がない。九州語 *suba, tuba* は、アクセントと母音が規則的に対応し、かつ語頭に *t* を持つ低起式の pJ **tu*「唾」（cf. WOJ *tu*「唾」、MJ *tu* L、WOJ *tupasiru*「唾」、MJ *tufaki* LLL「唾」、pR **tuzu* B「唾」）と同源と思われる。pJ **tu*「唾」と関係する pJ **tupa* 2.3「唇」の再建がおそらく可能であり⁷、現代の九州と山口県に分布する *tuba* ~ *tsuba* は語頭の破裂音を保持した古形とみなせる。宮崎県南部、鹿児島県、琉球列島に見られる**suba*の反映形はしたがって、散発的な変化*t > sを被った改新であり、南部九州の言語と琉球諸語はこの改新を共有していると結論される。

dou*「自分自身」、iri*「錐」（五十嵐 2021; Igarashi 2022）、**suba*「唇」のほかに、例えば**obukure*-「溺れる」、**puke*-「間引く」、**soné*「海中の魚の取れる瀬」等には、これらが九州語と琉球諸語のみが共有する改新であることを示すかなり明確な証拠を提出することができるが、これについては稿を改めて論じる。

日本本土の諸言語が共有する語彙面の改新としてこれまで論じられてきたのがただの2語であると比較すると、九州語と琉球語が独占的に共有する語彙の規模ははるかに大きい。この事実は、現代九州語が琉球諸語とともに南国語系統に属するとするHモデル・Iモデルを支持する。

5.3 現代東日本語が東国語系統である証拠（語彙の改新）

EOJの記録が乏しいことと、八丈語の語彙研究が琉球諸語ほどには進んでいないことから、現代東日本語とEOJ・八丈語のみが共有している語彙の検討は、現代九州語と琉球諸語の場合と比較して困難である。本稿では、東日本の非中央語的語彙のうち、五十嵐（2021）が系統関係を反映する言語形質の地理的分布と主張するマトリョーシカ分布を示すものに着目する。

マトリョーシカ分布とは、言語形質Xの地理的分布域を言語形質Yの分布域が完全に含

⁶ MJ *sufabur*-「しゃぶる」の後部要素は pJ **pur*-「振る」だろうが、もし前部要素が**sup*-「吸う」に関係している語幹だとしたら、それは動詞**sup*-「吸う」に古い名詞化接辞-*a*をつけた（所謂情態言化）**sup-a*「吸うもの」となるだろう。吸うことに関与する人体部位は主として唇と舌であるから、**sup-a*は後述する**tuba*「唇」の類義語とみなせるが、いずれにせよアクセントと分節音が異なるので別の語である。

⁷ WOJ *tupasiru* は pJ **tupa* 2.3「唇」と pJ **siru* 2.4「汁」からなる複合語であろう。MJ *tufaki*「唾」からは**tupa*を動詞化した**tupa-k*-「唾を吐く」が再建できるかもしれない。現代の東日本にみられる *citaki*「唾」も pJ **sita* 2.3「舌」を動詞化した**sita-k*-「唾を吐く」に由来するかもしれない。そもそも pJ **tupa*「唇」も、pJ **tu*「唾」を動詞化した**tu-p*「唾を吐く」に古い名詞化接辞-*a*をつけた**tu-p-a*「唾を吐くもの」に由来するかもしれない。

み、言語形質 X, Y の分布域を言語形質 Z の分布域が完全に含むときの、言語形質の地理的分布の類型である (五十嵐 2017b, 2019ab, 2021)。マトリョーシカ分布は、改新が Z, Y, X の順に生じ言語が分岐していく過程を再建することによって最もよく説明できる (Sagart 2004)。マトリョーシカ分布を借用のみによって説明するのは困難である。

東日本におけるマトリョーシカ分布は愛知県・岐阜県以東の諸言語に認められ、その中には八丈語も含まれる。五十嵐 (2022) はこれらの諸言語を「拡大東日本語派」と呼ぶ。愛知県・岐阜県以東の本州の諸言語と EOJ の生き残りとなえる八丈語とは、いくつかの改新と思われる形質を共有しており、その中には EOJ に在証される形質もある。このことは、EOJ と八丈語は現代の東日本の諸言語とともに東国語系統に属するとする見解を支持する。

以下、五十嵐 (2022) にしたがって、東日本においてマトリョーシカ分布を示す形質を検討する。利用されたデータは主として『日本言語地図』(LAJ (1966-74)) と『方言文法全国地図』(GAJ (1989-2006)) である。表記“LAJ-xxx”、“GAJ-xxx”における“xxx”はそれぞれの言語地図の地図番号を表す。マトリョーシカ分布を示す形質を区分する等語線を、最も外側に位置するものから最も内側に位置するものまで順に、E1 線, E2 線...E5 線と呼ぶ (図 5)。

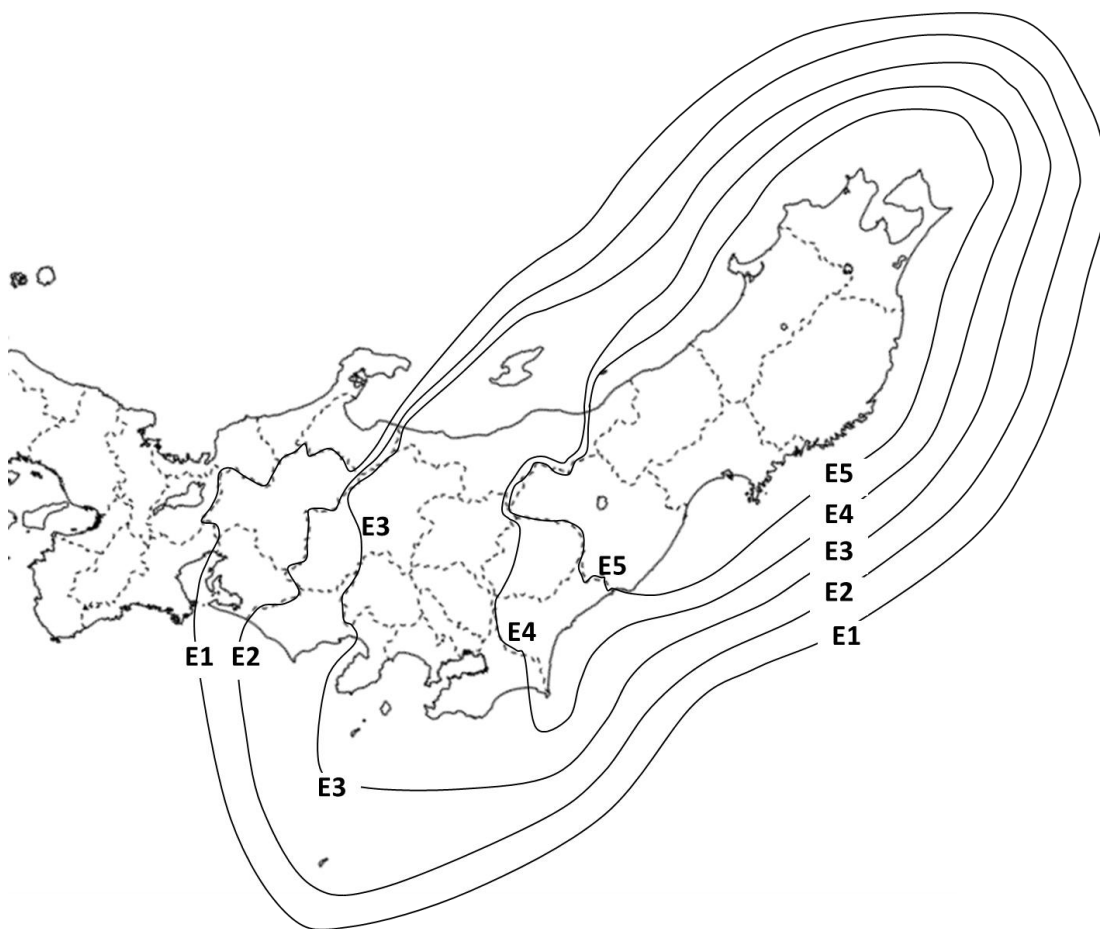


図 5 東日本におけるマトリョーシカ分布

E1線は新潟県・岐阜県・愛知県の西境界以東の地域をすべて囲む。五十嵐 (2022) はE1線内に分布する言語群を拡大東日本語派と呼ぶ。E1線で区分される形質には *kakaɛi* 「案山子」(LAJ-190) 等がある。九州を含む西日本には *kagaɛi* 「案山子」が分布している。「案山子」の語源が「嗅がし」すなわち「悪臭で害獣を追い払うもの」だとするならば(日国大2012)、**kag-as-i* (嗅ぐ-CAUS-NMLZ) が再建することができ、西日本における *kagaɛi* 「案山子」は古形であり、東日本の *kakasi* 「案山子」は不規則な無声化**g>k* という改新の結果とみなすことができる。またE1線内には、岐阜県に分布を欠くが *mama* 「崖」がある。*mama* 「崖」は、上代語では万葉集の東歌(相模)である3369歌(阿之我利乃麻万能古須気乃須我麻久良安是加麻可左武許呂勢多麻久良)にのみ在証され、WOJに在証明されない(ローレンス2013)ので、EOJの形質とみなすことができるだろう。ローレンス(2013)によると、この語は、現代の日琉諸語では八丈島を含む愛知県北部以東の東日本にのみ分布する。したがって、もし *mama* 「崖」が改新であるならば、この改新を有する現代東日本語はEOJとともに東国語系統に属するとみなせる。このほかにE1線内には、青森県に分布を欠くが *koke*-「鱗」(LAJ-217)、関東地方の大部分に分布を欠くが**a-kupi*-に遡ると思われる「踵」を意味する語(*akkui*, *akkee*, *akuto*, *aguto* 等(LAJ-129))が見つかる。再建される**a-kupi*-「踵」の**a*はWOJ *a*-「足」と、**kupi*はWOJ *kupi₁-pi₁su* 「踵」と関係があるだろう。

E2線は富山県、岐阜県、愛知と新潟県・長野県・静岡県との境界付近(日本方言学で糸魚川浜名湖線と呼ばれる等語線)以東の地域をすべて含む。五十嵐(2021)はE2線内に分布する言語群を中核東日本語群と呼ぶ。八丈島はE2線の内側に含まれる。E2線で区分される形質には *okkana*-「恐ろしい」(LAJ-42)、*ɛoppa*-「塩辛い」等がある。『日本国語大辞典』(日国大2012)には、*okkana*-の語源をMJ *ofokena*-「身分不相応な」とする語源説が挙げられている。MJ *ofokena*-の最初の語根はpJ **əpə* 「大」(>WOJ *opo*)の反映形(2番目の語根はWOJ *ke₁* 「異常」と同源)であろうから、もしこの語と *okkana*-が同源であるならば、*okkana*-は不規則な母音脱落による縮約が生じているので改新である。あるいは、E2線内の地域の西端に隣接する岐阜県・愛知県に分布する *osoga*-, *osuga*-, *ozuga*-「恐ろしい」(LAJ-42)が、*okkana*-と語根を共有している可能性がある。岐阜県・愛知県の形式はWOJ *osori*-「恐れる」(<pJ **ə[s,t]ərəi*-)あるいはWOJ *odi*- (<pJ **ədəi*-)「恐れる」と語根を共有していると思われる。もしこの見解が正しければ *okkana*-は不規則な母音脱落による縮約が生じているので改新である。*ɛoppa*-「塩辛い」はMJ *sifa-faju*- (『類聚名義抄』等)あるいはMJ *siwo-faju*- (『日葡辞書』(日葡辞1980)等)と関係があるとされている(長尾1986)。したがって *ɛoppa*-「塩辛い」は不規則な縮約を被っているため改新である。

E3線は新潟県の西境界から長野県の諏訪湖付近を通り、静岡県の安倍川付近へ抜ける線(地理学でいうところの糸魚川静岡構造線)以東の地域を囲む。八丈島はE3線の外側に位置するが、他の伊豆諸島は内側に位置する。E3線の内側に分布する形質には *janoasatte* 「明々後日」(LAJ-285)や否定の動詞接辞-*nai* (GAJ-72)等がある。-*nai*はEOJの否定の動詞接辞-*nap*との関連が指摘されており(上代辞1967)、東国語系言語の形質とみなせるだろう。EOJ

-*nap* は、武蔵国、上野国、下野国、常陸国、陸奥国にのみ在証され、Kupchik (2011) によると、彼が True EOJ と呼ぶ系統群における改新である。True EOJ は相模国、武蔵国、下総国、上総国、上野国、下野国、常陸国、陸奥国の言語からなり、遠江国、駿河国、信濃国が除外される系統群である。現代東日本語の -*nai* は分布、長野県 (旧信濃国) の北部に分布する点を除けば、改新 -*nap* が生じた True EOJ と一致する。地理的分布からも現代東日本語の -*nai* は EOJ *nap*-の反映であるとする見解が支持される。この改新を有する現代東日本語は EOJ とともに東国語系統に属するとみなすことができるだろう⁸。

E4 線は新潟県上越地方と中越地方の境界と福島県の西境界、茨城県と千葉県との境界より北の地域をすべて囲む等語線である。栃木県の北部・東部はこの線の内側に位置する。E4 線で区分される形質には、母音間の破裂音の有声化、特に /adama/ 「頭」 (LAJ-101) に見られるような歯茎破裂音の有声化がある。ただしこの形質は改新というよりむしろ古形とみなす見解が有力かもしれない。この等語線で区分される形質にはほかに、北東北に分布を欠いているが、*εitaki* 「唾」 (LAJ-118) がある。

E5 線は新潟県上越地方と中越地方の境界、福島県と北関東の境界に引かれる線より北の地域をすべて囲む。この線で区分される形質には *konoge* 「眉毛」 (LAJ-111) 等がある。

6. 中央語系言語への置き換えはあったのか？

6.1 基礎語彙における非中央語的形質の有無の検討

本稿では、接触による言語変化の研究からの知見に立脚し、基礎語彙における非中央語的形質の有無の検討を通じて置き換えの有無を判断する。すなわち、基礎語彙に非中央語的形質が認められれば、中央語系言語への置き換えは生じなかったとみなす。

接触に関与する2つの言語を以下、簡単のために L1, L2 と呼ぶ。本稿が検討対象とする言語では、L1 は非中央語系言語 (南国語系言語あるいは東国語系言語) であり、L2 は中央語系言語である。

Thomason (2001) は、言語の置き換えを伴わない場合の L2 から L1 への影響を「借用」と呼び、言語の置き換えが生じた際の L1 から L2 への影響を「置換誘発型干渉」(shift-induced interference) と呼んで区別する。「借用」と「置換誘発干渉」の違いは語彙に顕著に表れる。

Thomason (2001) のいう「借用」、すなわち言語の置き換えを伴わない場合の L2 から L1 への影響は、最初に非基礎語彙に現れる。基礎語彙に対する L2 からの影響は、もしあるのならば、その後で生じる。音韻論・統語論等の構造に対する L2 からの影響は、語彙への影

⁸ 八丈語は -*nai* を持たず、代わりに特別な形式 -*nnaka* を持つ。その一方で八丈語は、Kupchik (2011) が True EOJ の改新とする動詞接辞、推量の -*nam* と完了の -*ar* を持つ。したがって八丈語は True EOJ の娘言語とみなすことができるだろう。五十嵐 (2021) は、八丈語が -*nai* や *janoasatte* 等を欠いていることから、E3 線で区分される言語群 (長野県北部・静岡県東部以東の言語群) から八丈語を除外したが、この見解は再検討が必要である。八丈語は元来 -*nap* に遡る形式を有していたが、それがより新しい -*nnaka* に取って代わられた可能性を探求する必要がある。

響の後に生じる。なぜなら、「借用」においては、語彙の借用が L1 の音韻論・統語論の変化を誘発するからである。

それに対して、Thomason (2001) の言う「置換誘発型干渉」、すなわち言語の置き換えを伴う場合における L1 から L2 への影響は、音韻論・統語論等の構造的特徴に最初に生じる。語彙に対する L1 から L2 への影響は全く生じないか、生じるとするならば、構造的特徴への影響の後に生じる。第2言語習得の過程と同じように、話者はまず L2 の語彙を習得する。構造的な特徴 (音韻論・統語論・形態論) の完全な習得はそれに遅れる。そのため、話者は L1 の影響を音韻論・統語論に受けた L2 を話すことになる。話者が L1 を捨て去り L2 に移行した後も L1 の影響 (いわゆる基層言語からの干渉 (substratum interference)) が残ることがあるが、それは音韻論・統語論に顕著に認められ、語彙には全く認められないことがある。Thomason (2001) は、「置換誘発型干渉」には「目標言語の不完全な学習」 (imperfect learning of a target language) が関わるとしているが、L2 に置き換えられた後にもなお残る L1 の形質は、最初に学習する語彙ではなく、それより学習が遅れる音韻論・統語論・形態論にこそ認められることになる。

「借用」と「置換誘発型干渉」の違いは、Thomason (2001) の提示するペルーにおけるケチュア語とスペイン語の二言語使用話者の例を検討すると理解しやすい。彼ら話すケチュア語 (L1) には、スペイン語 (L2) の語彙の借用が多くみられるが、それと比較してスペイン語からの構造 (音韻、形態、統語) への干渉は少ない。それに対して、彼らの話すスペイン語 (L2) には、ケチュア語からの構造への干渉が強く認められるが、それと比較してケチュア語からの語彙の借用は少ない。

接触による言語変化研究の知見に基づけば、ある言語における語彙の分布の検討を行うことによって、(11) のような推論を行うことが可能となる。

- (11) a. 基礎語彙に非中央語的形質がない = 中央語系言語への置き換えあり
b. 基礎語彙に非中央語的形質がある = 中央語系言語への置き換えなし

ある言語の基礎語彙に非中央語的形質が全く認められないのであれば、その言語は中央語系言語へと置き換えられたと推測することができる (11a)。言語の置き換えにおいては、非中央語系言語 (L1) の話者はまず中央語系言語 (L2) の語彙を習得するはずであり、語彙の習得は基礎語彙から非基礎語彙へと行われるはずなので、基礎語彙に非中央語的形質は全く残らないはずである。

反対に、もしある言語の基礎語彙に非中央語的形質が認められるのならば、その言語は中央語系言語に置き換えられていないと推測することができる (11b)。置き換えを伴わない条件下では、非中央語系言語 (L1) の話者は、中央語系言語 (L2) から、最初に非基礎語彙を借用し、言語接触が激しい場合はその後に基礎語彙を借用するので、最も極端な場合を除いて、基礎語彙には非中央語系言語 (L1) の形質が残されるはずである。

以上から、中央語系言語への置き換えの有無を、基礎語彙に非中央語的形質が認められるか否かに基づいて判断する基準を立てることができる。もし基礎語彙に非中央語的形質が残っているのならば、中央語系言語への置き換えは生じなかったとみなされる。

6.2 現代九州語の基礎語彙における非中央語的形質

現代九州語の非中央語的形質は基礎語彙にも認められる。現代九州語に観察される非中央語的形質には、南国語系言語が琉球列島に拡散した後の時代の九州で生じた改新も含まれる。「肥筑方言」に特徴的な文末詞=*tai*,=*bai*などはその好例であろう。そのような改新は、中央語系言語への(仮説上の)置き換えの後でも生じうるので、たとえ基礎語彙にそれが認められたとしても、置き換えの有無の判断には利用できない。そのような形質を除外するために、九州語と琉球諸語が共有する非中央語的形質に考察の対象を限定する。このようにすることによって、中央語系統と南国語系統とが分岐した時点の非中央語的形質のみを考察の対象とできる。5.2節の「九州・琉球同源語」の場合とは異なり、九州語・琉球諸語以外の日琉諸語にも共有されている非中央語的形質は除外しない。そのような非中央語形質は *pJ* に遡る古形であり、中央語系言語に認められる形質が改新である可能性があるが、置き換えの有無の判断には、ある形式が中央語的形質であるか否かが問題となるので、その形質が南国語系統における改新であるか否かは問題にならない。

(12) は、中央語系言語とは異なる音変化 (4.2 節) によって生じた、現代九州語における非中央語的形質であり、かつ Swadesh (1952, 1971) の基礎語彙リストに含まれるものである。(12ab) は *pJ* に遡る古形の保持であり、(12c) は九州語と琉球諸語が共有する音変化の結果であるが、非中央語的形質であることには変わりはない。

(12) 九州語の基礎語彙に残る非中央語的形質 (I) ⁹

a. “sea” 「海」	<i>omi</i>	cf. WOJ <i>umi</i> ₁	(< <i>pJ</i> * <i>omi</i>)
b. “water” 「水」	<i>mezu</i>	cf. WOJ <i>mi</i> ₁ <i>du</i>	(< <i>pJ</i> * <i>medu</i>)
c. “to fall” 「落ちる」	<i>ote-</i>	cf. WOJ <i>oti-</i>	(< <i>pJ</i> * <i>ətəi-</i>)

(13) は、九州語と琉球諸語だけでなく、他の日琉諸語にも共有されている非中央語的形質であり、かつ Swadesh の基礎語彙リストに含まれるものである。これらの一部あるいはすべては *pJ* に遡る古形の可能性があるが、非中央語的形質であることは変わらない。

⁹ 九州において、*omi* 「海」は長崎県旧西彼杵郡野母崎町 (原田 (編) 1993) と種子島 (上村 1959) にのみ確認され、*mezu* 「水」は鹿児島県薩摩郡鹿島村藺牟田 (橋口 2004) のみに確認される。*ote-* 「落ちる」は佐賀県のデータが乏しいが県単位で見ると九州全県に確認される (五十嵐 accepted)。

(13) 九州語の基礎語彙に残る非中央語的形質 (II) ¹⁰

- a. “knee” 「膝」 *tubuei* cf. WOJ *pi₁za*
b. “fish” 「魚」 *io* cf. WOJ *uwo* (< pJ *iwo)

現代の諸言語では「魚」を表す語として、EOJ *uwo* のように語頭が *u* のものと、pR *io A 「魚」のように語頭が *i* のものがある。後続する唇音との同化による *iwo > *uwo という変化を再建した方が、その逆の *uwo > *iwo より音声的に妥当であるので、pJ *iwo 「魚」が再建される。この再建が正しければ WOJ *uwo* は中央語系統における改新である。しかしながら、平安時代以降の中央語の文献には *uwo に対応する形式だけでなく、*iwo に対応する形式も在証されるという (平子・ペラルド 2013)。したがって中央語系統言語では古形の *iwo の反映とともに改新形の *uwo の反映が共存していたとみるべきであろう¹¹。したがって (13b) は純粋に非中央語的な形質とは言えず、証拠としては強くない。

(14) は Swadesh リストにはないが、身体部位名称語彙と親族名称語彙であり、基礎語彙に準じるものである。(14ab) は九州語と琉球諸語のみが共有する同源語であり、(14c) は pJ に遡る古形としての非中央語的形質である。

(14) 九州語の身体部位名称・親族名称語彙に残る非中央語的形質¹²

- a. 「唇」 *suba* cf. WOJ *kutipi₁ru* (cf. pJ *tupa?)
b. 「踵」 *ado* cf. WOJ *kupi₁pi₁su*
c. 「婿」 *moko* cf. WOJ *muko₁* (< pJ *moko)

Pellard (2021) は、「九州・琉球同源語」に動植物名が多くみられることは、南国語系言語 (Pellard の用語では琉球祖語) が基層言語として働いたとすれば説明がつくと述べる。しかし私見では、非基礎語彙における L1 の語彙の分布から L2 への置き換えの有無を判断することはできない。たしかに固有種の動植物を表す L1 の語は、相当する語が L2 にないので、L2 への置き換えが生じた後にも L1 の語が残る。しかし同時に、置き換えが生じない場合であっても、相当する語を欠く L2 から語を借用することはできないので、やはり L1 の語が残る。中央語への置き換えの有無の判断には非基礎語彙ではなく基礎語彙を検討すべきである。

¹⁰ *tsubusi* ~ *tubusi* 「膝」は九州と四国に分布する (方大辞 1989)。

¹¹ 語頭母音を保持している *io* 「魚」は東北地方北部を除いた日本本土に広範に分布する (LAJ-216; 方大辞 1989)。語頭が *u* である改新形 *uo* も日本本土全域に分布しているが、九州南部に乏しい (LAJ-216)。「魚」を意味する語として現代の諸言語に最も広範に認められるのは *sakana* であるが、琉球列島には在証されず、九州南部にも乏しい (LAJ-216)。*sakana* は pJ *sakai 2.1 「酒」と pJ *na 1.3 「菜」からなる複合語であり、「魚」への意味変化を被った改新である。これが元来の pJ *iwo に取って代わって広範に分布しているが、『日本言語地図』(LAJ-216)によると、言語によっては pJ *iwo の反映形と pJ *sakai-na の反映形とが共存し、「総称としての魚」「海魚」「川魚」等の意味の区別に用いられている。

¹² 九州において *suba* 「唇」は宮崎県南部と鹿児島県に広範に分布し (LAJ-116)、*ado* 「踵」は北部を除いた地域に広範に分布し (LAJ-129)、*moko* 「婿」は種子島にのみ分布する (植村 2001)。

以上のように、言語が置き換わるのならばまず先に学習されるはずの基礎語彙に、三大系統への分岐時点あるいはそれ以前に遡る非中央語的形質が残っている事実は、九州では中央語系言語の置き換えが生じず、現代も南国語系言語が用いられていることを意味する。

6.3 現代東日本語の基礎語彙における非中央語的形質

EOJ の基礎語彙がどのようなものであったかは EOJ の資料が乏しいためにほとんど不明である。東国系言語の祖語の基礎語彙がどのようなものであったかを明らかにするのは今後の課題である。

一部の現代東日本語が EOJ と共有する非中央語的形質としては、古形の保持である動詞連体形語尾-*o* (<pJ*o)、形容詞連体形語尾-*ke* (pJ*-ke) と、改新の動詞の否定接辞-*nai* (EOJ -*nap*) があつた (4.3 節、5.3 節)。動詞の否定接辞については Swadesh の基礎語彙リストの “not” に相当しうるので、これを基礎語彙における非中央語的形質とみなし、置き換えの反証ととらえることも可能だが、問題もある。連体形語尾や動詞接辞の保持は、語彙というより形態論・統語論の保持とみることも可能である。特に動詞・形容詞の連体形語尾は、終止形語尾との区別の保持という形で残っているため、形態論・統語論における形質とみなす方が妥当であろう。L1 における構造的形質は L2 への置き換えの後に基層言語からの干渉として認められることがある。したがって、問題の形質は置き換えの反証にはならない。

Swadesh の基礎語彙リストには動詞 “to fear” があるが、これと関連して八丈語を含む現代東日本語には非中央語的形質である *okkana*-がある (5.3 節)。また、Swadesh の基礎語彙リストにはないが、身体名称語彙の「踵」として、*a-kupi に遡ると思われる形式 (*akkui*, *akkee*, *akuto*, *aguto* 等 (LAJ-129)) が、東日本に広範に分布する (5.3 節)。八丈島は *akkei*, *akkee* であり (LAJ-129)、やはり *a-kupi に遡ると思われる形式である。これが中央語系言語に置き換えられた後に伝播したものでないのならば、身体名称語彙に残る東国系言語 (L1) の形質ということになる。しかしながら、これらが三大系統への分岐時点あるいはそれ以前に遡る非中央語的形質であることを示す強い証拠はいまのところない。Swadesh の基礎語彙リストの “fish” は八丈語、および東日本の一部の諸言語で、九州語と同様に、非中央語的な古形の *io* である。これは基礎語彙に残る非中央語的形質とみなせるが、ただの 1 語だけでは証拠として弱い。

現代の東日本語が中央語系言語に置き換えられたものか否かを基礎語彙に基づいて検討するためには、利用可能な証拠が乏しい。この問いに対する答えは保留せざるを得ず、それは今後の課題として残される。

7. 結論

本稿は、現代の東日本と九州の言語に非中央語的形質が残っていることを確認し、これらの言語が中央語系言語に置き換えられたものなのか否かを論じた。現代九州語の基礎語彙

には、pR が三大系統（南国語系統、中央語系統、東国語系統）に分岐した時代、あるいはそれ以前の非中央語的形質が残っている。言語の置き換えが生じた場合、語彙は最初に置き換わる形質であり、その中でも基礎語彙はまず先に置き換わるはずの形質である。現代九州語の基礎語彙に非中央語的形質が残っている事実は、九州では中央語系言語への置き換えが生じなかったことを示している。現代の九州語が琉球諸語とともに単系系統群をなすとする服部四郎の説（Hモデル）が支持される。

東日本の諸言語にも非中央語的形質が残っているが、中央語系言語への置き換えが生じたか否かを判断するために利用可能なデータが乏しい。その判断のためには東国語系言語の祖語の基礎語彙の再建が必要であるが、これは今後の課題である。

謝辞

発表原稿執筆時にケナン・セリック氏（国立国語研究所）に有益なコメントをいただきました。感謝申し上げます。本研究は、国立国語研究所第4期共同研究プロジェクト「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（五十嵐陽介）、「消滅危機言語の保存研究」（山田真寛）、および JSPS 科研費 17H02332, 19H00530, 16H01933, 21K00517, 22H00007 の助成を受けています。

引用文献

- 安里進 (2002) 「琉球文化圏と琉球王国の形成」赤坂憲雄、中村生雄、原田信男、三浦佑之 (編) 『いくつもの日本 I : 日本を問い直す』, 155–178, 東京: 岩波書店.
- Atkinson, Q.D. & R.D. Gray (2005) “Curious parallels and curious connections? Phylogenetic thinking in biology and historical linguistics,” *Systematic Biology* 54 (4), 513–526.
- Brugmann, Karl (1884) “Zur Frage nach den Verwandtschaftsverhältnissen der indogermanischen Sprachen,” *Internationale Zeitschrift für allgemeine Sprachwissenschaft* 1, 228–256.
- Campbell, Lyle and William J. Poser (2008) *Language Classification: History and Method*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Celik, Kenan (2022) 「琉球祖語の*weke-の語源とその周辺について」第2回プロトジャポニック研究会. 東京: 国立国語研究所.
- Fox, Anthony (1995) *Linguistic Reconstruction: An Introduction to Theory and Method*, Oxford: Oxford University Press.
- Frellesvig, Bjarke (2010) *A History of the Japanese Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2004) “The Vowels of Proto-Japanese,” *Japanese Language and Literature* 38(2), 281–299.
- Frellesvig, Bjarke and John Whitman (2008) “Evidence for seven vowels in proto-Japanese,” In:

Bjarke Frellesvig and John Whitman (eds.) *Proto-Japanese: Issues and Prospects*, 15–41, John Benjamin.

GAJ (1989-2006) = 国立国語研究所 (編) (1989-2006) 『方言文法全国地図』全6巻, 東京: 財務省印刷局.

蜂矢真郷 (2007) 「上代特殊仮名遣に関わる語彙」萬葉学会編輯委員会 (編) 『萬葉』197:1–36.

原田章之進 (編) (1993) 『長崎県方言辞典』東京: 風間書房.

橋口満 (2004a) 『鹿児島方言大辞典 (上)』鹿児島: 高城書房.

橋口満 (2004b) 『鹿児島方言大辞典 (下)』鹿児島: 高城書房.

服部四郎 (1968) 「八丈島方言について」『ことばの宇宙』3(11), 92–5. (服部 (著)・上野 (補注) (2018), 39–43 に再録)

服部四郎 (1976a) 「琉球方言と本土方言」『沖縄学の黎明—伊波普猷先生百年記念誌』, 伊波普猷生誕百年記念会 (編), 7–55, 沖縄: 沖縄文化協会. (服部 (著)・上野 (補注) (2018), 45–81 に再掲).

服部四郎 (1976b) 「日本祖語の母音体系」『朝日新聞』1976年6月22日夕刊 (服部 (著)・上野 (補注) (2018), 83–85 に再掲).

服部四郎 (1978a) 「日本祖語について (8)」『月刊言語』7(10), 94–103. (服部 (著)・上野 (補注) (2018), 170–182 に再掲.)

服部四郎 (1978b) 「日本祖語について (9)」『月刊言語』7(11), 108–117. (服部 (著)・上野 (補注) (2018), 183–192 に再掲.)

服部四郎 (1979) 「日本祖語について (19)」『月刊言語』8(9), 108–118. (服部 (著)・上野 (補注) (2018), 305–319 に再掲.)

服部四郎 (著)・上野善道 (補注) (2018) 『日本祖語の再建』東京: 岩波書店.

彦坂佳宜 (2001) 「九州方言における活用型統合の模様とその経緯: 『方言文法地図』九州地域の解釈」『日本語科学』9: 101–122.

Swadesh, Morris (1952). “Lexicostatistic Dating of Prehistoric Ethnic Contacts,” *Proceedings of the American Philosophical Society* 96: 452–463.

Swadesh, Morris (1971). *The Origin and Diversification of Language*. Edited by Joel F. Sherzer; Introduction by Dell Hymes. Chicago: Aldine-Atherton.

平子達也・トマペラル (2013) 「八丈語の古さと新しさ」『八丈方言調査報告書: 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究』, 木部暢子 (編), 47–67. 東京: 国立国語研究所.

平山輝男・大野真男・久野マリ子・大島一郎・久野真・杉村孝夫 (編) (1992–93) 『現代日本語方言大辞典 (1–6)』東京: 明治書院.

方大辞 (1989) = 小学館国語辞典編集部 (編) 『日本方言大辞典』全3巻. 東京: 小学館.

五十嵐陽介 (2016) 「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか? —「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱—」第3回国際日本文化研究センター

五十嵐陽介 (2022) 「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」言語系統樹ワークショップ。
2022年12月25日沖縄県立博物館・美術館 (オンライン併用)

共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたかー日本言語学史の光と影」,
京都: 国際日本文化研究センター。

五十嵐陽介 (2017a) 「九州・琉球同源語調査票」一橋大学大学院五十嵐陽介ゼミ「終日ゼミ」
発表原稿, 東京: 一橋大学。

五十嵐陽介 (2017b) 「共通の改新に基づく分岐学的手法を用いた日本語諸方言の系統分類:
南日本語派 (琉球を含む) と東日本語派 (八丈を含む) の提唱」 「比較言語学的方法に
よる日本語・琉球諸語諸方言の祖語の再建および系統樹の構築」第1回打ち合わせ・検
討会「日本語諸方言の系統関係について」, 東京: 国立国語研究所。

五十嵐陽介 (2018a) 「九州語と琉球語からなる「南日本語派」は成立するか?: 共通改新と
しての九州・琉球同源語に焦点を置いた系統樹構築」鹿児島大学公開共同シンポジウム
「九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」, 鹿児島: 鹿児島大学。

五十嵐陽介 (2018b) 「分岐学的手法に基づいた日本語・琉球語諸方言の系統分類の試み」シ
ンポジウム「フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史」, 東京: 国立国語研究
所。

五十嵐陽介 (2021) 「分岐学的手法に基づいた日琉諸語の系統分類の試み」林由華・衣畑智
英・木部暢子 (編) 『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』17-51. 東京: 開
拓社。

Igarashi, Yosuke (2022) Reconstruction of Ryukyuan tone classes of Middle Japanese Class 2.4 and
2.5 nouns. *Open Linguistics* 8: 232-257.

五十嵐陽介 (accepted) 「現代九州諸方言における旧上二段動詞の「下二段化」は九州・琉球
祖語仮説を支持するか?」『言語研究』

伊波普猷 (1911) 「琉球人の祖先に就いて」伊波普猷 (著) 『古琉球』1-60. 沖縄: 沖縄公論
社。

伊波普猷 (1974) 「琉球語と奄岐方言との比較対照」『伊波普猷全集』第4巻, 233-276, 服部
四郎 (編), 東京: 平凡社。

Jarosz, Aleksandra (2019) “Non-Core Vocabulary Cognates in Ryukyuan and Kyushu.” *Proceedings
of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia*,
8-29.

Jarosz, Aleksandra, Martine Robbeets, Ricardo Fernandes, Hiroto Takamiya, Akito Shinzato, Naoko
Nakamura, Maria Shinoto, and Mark Hudson (2022) “Demography, trade and state power: A
tripartite model of medieval farming/language dispersals in the Ryukyu Islands.” *Evolutionary
Human Sciences* 4, E4, 1-22.

上代辞 (1967) = 上代語辞典編集委員会 (編) 『時代別国語大辞典上代編』東京: 三省堂。

狩俣繁久 (2016) 「日琉祖語はどのように語られてきたか」国際日本文化研究センター共同
研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたかー日本言語学史の光と影」第3回
共同研究会, 京都: 国際日本文化研究センター。

- 狩俣繁久 (2018) 「語彙と文法から探る琉球語の南北差と九州からのヒトの移動」鹿児島大学公開共同シンポジウム「九州-沖縄におけるコトバとヒト・モノの移動」, 鹿児島: 鹿児島大学.
- 狩俣繁久 (2020) 「琉球語の起源はどのように語られたか: 琉球語と九州方言の関係を問う」長田俊樹 (編) 『日本語「起源」論の歴史と展望: 日本語の起源はどのように論じられてきたか』 227-249. 東京: 三省堂.
- 金田一春彦 (1967) 「東国方言の歴史を考える」『国語学』 69, 40-50.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研宄—原理と方法』 東京: 塙書房.
- Kupchik, John E. (2011) *A Grammar of Eastern Old Japanese Dialects*. PhD dissertation, University of Hawai'i.
- LAJ (1966-74) = 国立国語研究所 (編) (1966-74) 『日本言語地図』 全6巻, 東京: 大蔵省印刷局.
- ローレンス, ウェイン (2013) 「ママをたずねて三千里: 八丈方言の系統的位罫について」木部暢子 (編) 『八丈方言調査報告書: 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究』 71-75. 東京: 国立国語研究所.
- Leskien, August (1876) *Die Declination im Slawisch-Litauischen und Germanischen*. Leipzig: Hirzel.
- 馬瀬良雄 (1983) 「長野県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 6 中部地方の方言』, 55-95, 東京: 国書刊行会.
- 長尾勇 (1986) 「しははゆし考」『語文』 66: 68-78.
- 日国大 (2012) = 日本国語大辞典第二版編集委員会 (編) 『日本国語大辞典第二版』 東京: 小学館.
- 日葡辞 (1980) = 土井忠夫, 森田武, 長南実 (編訳) 『邦訳日葡辞書』 東京: 岩波書店.
- 野原三義 (1979, 1981a, 1981b, 1982, 1983) 「琉球方言と九州諸方言との比較」(I, II, III, IV, V) 『沖縄国際大学文学部紀要: 国文学篇』 8(1), 1-16; 9(1-2), 1-20; 10(1), 1-16; 11(1-2), 1-16; 12(2), A1-A14.
- 大島一郎 (1984) 「伊豆諸島の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一 (編) 『講座方言学 5 関東地方の方言』 233-271, 東京: 国書刊行会.
- Pellard, Thomas (2008) "Proto-Japonic *e and *o in Eastern Old Japanese," *Cahiers de linguistique Asie Orientale* 37 (2), 133-158.
- Pellard, Thomas (2009) *Ogami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryukyu*. Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.
- Pellard, Thomas (2013) "Ryukyuan perspectives on the proto-Japonic vowel system," In: Bjarke Frellesvig and Peter Sells (eds.) *Japanese/Korean Linguistics* 20, 81-96, CSLI Publications.
- Pellard, Thomas (2015) "The linguistic archeology of the Ryukyu Island," In: Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.) *Handbook of the Ryukyuan Languages: History, Structure, and Use*, 14-37, Berlin: DeGruyter Mouton.

五十嵐陽介 (2022) 「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」言語系統樹ワークショップ。
2022年12月25日沖縄県立博物館・美術館 (オンライン併用)

- Pellard, Thomas (2021) 「日琉諸語の系統分類と分岐について」林由華・衣畑智英・木部暢子
(編) 『フィールドと文献から見る日琉諸語の系統と歴史』 2-16. 東京: 開拓社.
- Pellard, Thomas (forthcoming) Ryukyuan and the reconstruction of proto-Japanese-Ryukyuan. Bjarke
Frellesvig, Satoshi Kinsui, and John Whitman (eds.) *Handbook of Japanese Historical
Linguistics*, Berlin/Boston: De Gruyter Mouton.
- Sagart, Laurent (2004) “The higher phylogeny of Austronesian and the position of Tai-Kadai,”
Oceanic Linguistics 43 (2), 411-444.
- 阪倉篤義 (1975) 「書評 大野晋著『日本語をさかのぼる』」『文学』43(4)
- 迫野虔徳 (1998a) 「九州方言の動詞の活用」『語文研究』85: 1-11.
- Thomason, Sarah G. (2001) *Language Contact: An Introduction*. Washington, D.C.: Georgetown
University Press.
- Thorpe, M.L. (1983) Ryūkyūan language history. Ph.D. thesis, University of Southern California.
- 上村幸雄 (1959) 「鹿児島県西之表市西之表」国立国語研究所 (編) 『日本方言の記述的研究』
343-364, 東京: 明治書院.
- 植村雄太郎 (2001) 『種子島方言辞典』東京: 武蔵野書院.
- Vovin, Alexander (2011) “On one more source of Old Japanese *i*2” *Journal of East Asian Linguistics*
20, 219-228.